目次

□教育の一面　藤井利譽
□甘藷先生（青木昆陽）　下村三四吉
□近世日本畫に於ける二運動の消長　澤村專太郎
□青年より見たる青年期　蚊泉靖子
□横須賀港の沿革　西田彌生
□謝三皇太子巡二遊山陰一牋（代）　細田劍堂
□祝辭（代作）　竹田みち
□病院にて（歌）　尾上柴舟
□秋草、秋の鳥（歌）　L、T、
□夕の庭（歌）　L、S、
□身の儘に（歌）　千葉安良
□六疊より　わかな
□中禪寺に行く道　粒木つれ
□國分寺まで。　S、T、
■雜報　□第廿三回文科學術談話會記事　□會計報告□會員動靜
■研究　□日光廟の建築
■記念附錄　□回顧四十年

教育の一面

藤井利譽

人が世の中に出て活動するには、其の爲の準備が必要である。此の活動の爲の準備と云ふ事は、言ひ換へれば人が其の精神を修養する事によつて得られる所の心の落ち付き、即ち、所謂安心立命の境地を得ると云ふ事である。精神にこの落ち付きさへあれば、從つて其の生活は安定であり、且つ、常に一定の目的に向ひ一定の主義方針のもとに活動することが出來る。此の精神の落ち付きは、宗教によつて與へられることも良からうが、教育によつても亦與へらるべきものではあるまいか。然るに今日の教育は、却つて被教育者を不安定な方向に導く傾きがあるやうに思ふ。即ち、今日の學生は、學校に於て種々の知識を啓發され、色々な事を知れば知るほど、人生に對して種々の疑惑を生じ、其の生活に不安を感じて精神には更に落ち付きがなく、常に動搖し勝ちな不安定の生活をする。これは現今教育界に於ける根本的の欠陷であらうと思ふ。

之に對しては幾多の方法があらうけれども、彼等をして、その現在を遠き將來に續くべき現在として、常に滿足し安心して進んでゆく樣に導くことが根本である。それ故日々の學習に際しての精神狀態の如きも、生徒自らそれを樂しみ安靜な心で學習する樣に導くべきである。もし彼等が穩かな精神狀態を保持し得ぬ樣

な手段方法を取る時は、勢ひ、彼等はそれを樂まず忽ち他に向つて、滿足を求め樣とするものである。然るに今日の敎育者の態度は、時とすると、却つて生徒の學習狀態を混亂させる事がある。卽ち、無理な課題、無理な發問等により、又は、徒らに彼等の競爭心を挑發して之を利用せんとする事によつて來たす結果等がその例である。かゝる敎育によつて彼等は無意義な競爭心に驅られ、常に齷齪としてもがき苦しんで居る。つまり其の競爭心を滿足させる爲に、理解しきれぬ事でも、また、出來ぬ事でも、器械的になりと習得し又は發表しようとするのである。勿論競爭は廣い意味に於ては大切であるが、競爭の爲の競爭は、却つて大いに避くべきである。殊に競爭心は何人と雖も先天的に之を持つて居るものであるから、特に周圍から挑發的に刺戟して、それを利用せんとするが如きは大きな誤りであつて、彼等はその爲におど〳〵して一時も落ち付いて居られない。敎育者たるものは大いにこゝに意を用ふべきである。

又、敎育上非常に抑制の行はれる事が、被敎育者の精神上に甚しい影響を及ぼすものである。卽ち、理論に於ては敎授上の課程及び豫定は生徒心身の發達に伴ふべしと論じながら、實際は全く反對に、極めて器械的注入的であつて、開發などゝ云ふ事は空論に止まつて一向實行せられず、豫め定められた丈の仕事を一通り濟ませさへすれば、それで能事終れりとして、唯むやみに注ぎこまうとする。もし不幸にしてそれらの事柄を十分に受け取り得ず、理解し得ぬものがあると、それは劣敗者と云ふ哀れな名のもとに用捨なく捨て去られ、斥けられてしまふ。この樣なことでは、生徒の興味に訴へて、自ら樂しみ自ら滿足して、自發的にさしめると云ふ風な事は言ふべくしてとても行ひ得ぬ事である、斯の如き抑壓的敎授の結果、被敎育者は理解し消化し得ぬそれらの事柄を、たゞ、單なる記憶として僅かに頭に殘して置くに過ぎないで、それに依つ

て人としての價値を增し、人格を向上させると云ふ所には少しも觸れて居ない。既に人間敎育の根本に觸れずして、徒らに無理な事柄をつめこむ結果、却つて彼等の思想や精神を混亂せしむるならば、その敎育は根本に於て大いに誤つてゐるといふ事は明白である。

以上は少くとも現今敎育上の二大缺點と認むるのである、他日實際敎育に從事しようとする人々のよく考へて置くべき必要問題であると思ふ。そこでこれに對する救濟方法は唯、精神に落ちつきを與へる樣に導びくより外はない。卽ち、彼等をして現在の自分に滿足し理想に從つて前進する樣に導びくにある。その爲には種々の方法手段があらうけれども、先づ、敎育者自身その精神を修養する事が根本である。敎育者自ら心的混亂の狀態にあつて、不安焦燥の念に苦しみながら、被敎育者にばかり、もがくな、落ちつけと云つてもそれは全く不可能な事である。敎育は敎師の人格の反映である。敎師が先づその內心に安靜と平和とを保ち靜より動を生ずる樣にせねばならぬ。卽ち、敎師はその周圍なる、生徒、同僚、生徒の父兄等との間に起る些細な感情によつて精神を混亂せしめる樣であつてはならぬ。つまり敎育者の仕事が周圍の爲に支配せられ又、その批判によつてむやみに動かされるのはよくない事である。勿論、周圍の批評に對しては自ら深く省みて取るべきは採り、心靜かに改善の道をはかるべきではあるが、その爲に心の平和を亂し、落ちつきを失ふ樣な事があつてはならぬ。常に凡ての物事に對してその根本に立ち入つて深く研究する科學的態度が必要である。例へば一學說を讀み、一意見を聞くについても、唯、表面的に見聞して或は同意し或は反抗するといふ樣な事なしに、其の依つて來る所を探り、其の立場の如何を研究し考察して始めて取るべきは採り、捨つべきは捨てるところに意味があるので、朝には甲の說に動かされ、夕には乙の意見に盲從するといふ皮層淺薄

な態度は最も避くべきである。如何なる些細な事柄に對しても實驗的科學的態度をとつて根本的に研究し、それを十分體得して後始めて人を敎導する事も出來るものである。

斯くの如く、自己の安心立命の境地を得る爲の修養の基礎は情意の方面にある事は言ふまでもないが、其の第一歩はやはり身体である。虛弱な人がどうして現在に於て安定に活動し得よう。人は心力と體力と相俟つてはじめて成就するものである。又我々が前に述べた樣な科學的生活をなすと共に、一方、簡易生活を實現する事が生活上大いに意味のある事である。元來人間の根本は、人々がどこまでも Simplicity であり Innocence である事に存すると思ふ。然るに之を打ち毀すものはかの無意義な競爭や壓制であつて、この爲めに人々は遂にその精神の落ち付きを失ひ、益々不安定になつて來るものであるが、もし科學的生活と相俟つて簡易生活をする事が出來るならば從つて人々の生活は安靜である事が出來ると思ふ。(終)

(十月十五日筆記)

甘藷先生

(青木昆陽)

下村三四吉

(一) 甘藷先生の墓

賴山陽嘗て甘藷を擬人して『蹲鴟子傳』を作り、中にいへるあり、「蹲鴟子、性樸素不レ飾、而黃德內潤」、其平居心率二其子弟一、累々相引、未二曾相疎一、其濟レ人也、不レ避二湯鑊水火一、焦二毛髮一、嬰二金鐵一、剝二皮膚一、而不レ顧也、然喜與二田夫野人一交、不二自貴重一、是以聲價頗賤、王公貴人或不レ識二其面一、而權二衡人物一者、獨重レ之云」と。甘藷がその價廉にして、しかも豊味潤澤、能く貧民の飢餓を濟ひ且凶荒の備となるべきは、別に喋說するを要せず若し甘藷なくば、貧民の飢に泣くもの、それ幾何の多きを加ふべき。甘藷は實に貧民救濟の重要物なり、山陽の文能く之を狀して悉くせりといふべし。

抑々甘藷はもと支那湖廣地方より琉球に傳へられ、それより薩摩に及び、後遂に普く全國內に傳播繁衍するに至れるなり。而してこれが傳播を速にし萬民の鴻益を布きたるは、實に青木昆陽その人なり。宜なるかな、人昆陽を稱し甘藷先生といひ、氏も亦之を採りて自ら壽碣に題せるや。下總國馬加村に伊毛神の祠ありて、昆陽等この事に功ありし人々を祀れるは、亦その所以なりとす。

昆陽の墓は東京府荏原郡下目黑村に在り。目黑停車場より不動堂に赴くべき道を行くこと四五町にして右